

ニュータウン高齢化の特徴と問題点

関西学院大学教授

大谷 信介



おおたに・しんすけ

関西学院大学社会学部教授。社会学博士。社会調査士資格認定機構理事、事務局担当。専攻は都市社会学・社会調査論。主な著書に、『〈都市的なるもの〉の社会学』（ミネルヴァ書房、2007年）、『社会調査へのアプローチ【第2版】』（共編著・ミネルヴァ書房、2005年）、『問題意識と社会学研究』（編著・ミネルヴァ書房、2004年）、『これでいいのか市民意識調査』（編著・ミネルヴァ書房、2002年）、『現代都市住民のパーソナル・ネットワーク』（ミネルヴァ書房、1995年）など。

はじめに

日本最初の大規模ニュータウン（以下NT）として開発が進められたのは、1962年大阪千里NTであった。その後高度経済成長と都市化の進展にともなう、全国いたるところで大規模NTが開発されてきた。多くのNTは、住民の急速な高齢化とともに、「オールドタウン」と揶揄されることも多くなってきている。本稿では、国勢調査と2004年に私の研究室で実施した「関西ニュータウン調査」のデータを使って、「NTにおいて高齢化がどのように進みどのような問題が顕在化してくるのか」という問題を実証的に考察してみたい。

国勢調査からみる高齢化の実態

表1（次ページ）は、調査対象となったNTの年齢別人口構成を2000年の国勢調査町丁集計を使って作成し、全国構成と対比したものである。この表によって、各NTの大まかな高齢化状況を把握することが可能である（8年後の現在の状況は、人口構成表を8年分右にずらして考察する必要がある）。

NTの人口構成の大きな特徴は、三田・西神・和泉NTのグラフに象徴されるように、極端なM字型の人口構成をしている点である。これは住宅を必要とする年齢層とその子供世代が集中して移住してくることによって起こる特徴である。また、それぞれのNTは、まちびらき年次の古さ新しさによって同じような人口構成をしている点も特徴的である。まちびらき後40年以上経過している千里、泉北、須磨NTおよび約25年前に開発が開始された三田・西神NTの人口構成はそれぞれとても類似している。高齢化の深刻さという観点でみると、2000年時点では千里NTのみが顕在化し始めていたが、8年経過した現在では、泉北・須磨NTにおいても

高齢化が問題化しつつあると整理できる。

持ち家一戸建て世帯の高齢化実態 ～家族の縮小

ニュータウンの高齢化を考えていく場合、居住形態を考慮することが極めて重要である。それは、持ち家一戸建てや分譲・賃貸マンションおよび公営住宅といった居住形態毎に老後の生活設計が異なっていると考えられるからである。表2にも示されるよ

うに、居住形態別の世帯構成は、公営住宅や賃貸マンションが多い千里NT、持ち家一戸建てが多い三田・西神NT、分譲マンション比率が高い和泉NTといったように、NT毎に微妙に異なっている。ここでは最も比率の多い持ち家一戸建て世帯を対象を絞って、家族構成の変化という観点から高齢化の状況を分析してみたい。

「関西NT調査」では、入居当時と現在とでどのように家族構成が変化してきているかを把握するため、入居当時の家族状況も詳細に質問した。

表1 各NTの高齢者比率と年齢別人口グラフ

NT名 (開発年次)	高齢者比率		年齢別人口グラフ(2000年) *棒線がNT、折線が日本全体 *Y軸はいずれも2.5% *強調部分:65歳以上、団塊の世代	特徴
	65歳以上人口比率	60歳以上人口比率		
千里 (1962年)	19.1%	27.8%		2000年時点で、日本全体よりも高齢層のふくらみが大きい。さらに60歳前半から団塊の世代まで高齢者が増加し続けている
泉北 (1966年)	11.2%	17.7%		65歳以上の人口比率は低いが、60歳前半と団塊の世代の人口が突出している
須磨 (1967年)	14.5%	21.4%		まちびらき年が近い泉北NTとほぼ同じ人口構成をしているが、泉北より65歳以上比率が高い
平城 (1972年)	8.8%	12.8%		唯一、M字型が顕著でない＝人口の偏りがあまりないNTである。65歳以上の比率はとても低い
洛西 (1976年)	9.8%	14.8%		団塊の世代が非常に突出しているのが特徴である。60歳前半その前にも、人口の偏りが見られる
三田 (1981年)	6.9%	9.8%		現在、高齢層は少ないが、団塊の世代を先頭にそれ以降の大きな人口の塊と子世代の塊がある
西神 (1982年)	9.2%	12.8%		三田と同様、団塊の世代を含む大きな人口の偏りがあり、M字型も顕著である
トリヴェール和泉 (1992年)	4.3%	6.6%		まちびらきは1992年と新しく、若年層を中心としたNT。高齢化率は非常に低いが、顕著なM字型構成をしている
日本全体	17.3%	23.4%		高齢化率 日本の市部: 16.1% 日本の郡部: 21.8%

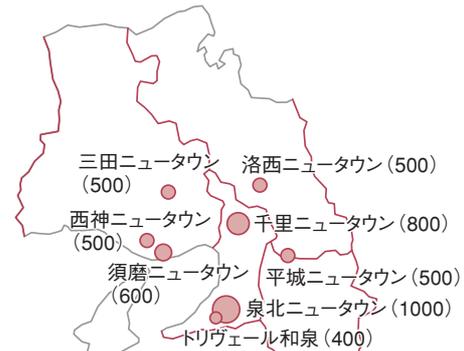
※ 2000年国勢調査町丁等別集計よりニュータウンの年齢別人口構成を作成

※ 団塊の世代とは、2000年時点で53歳～50歳だった層（1946年～1949年生まれ）とした

持ち家一戸建て層の入居当時の家族構成は、「夫婦と子」が全体の72.5%を占め、「3世代」12.4%、「夫婦のみ」10.4%という構成であった（表3）。NT一戸建ては、典型的な「夫婦と子」世帯によって形成されていると考えられる。さらに「夫婦と子」の420世帯の平均値等を参考として具体的な家族像を分析してみると、「夫40歳・妻38歳・子供2人（11歳と8歳）」が、NTに一戸建てを建てた時の典型的な家族像と描写することが可能である。

表4は、入居時に「夫婦と子」だった回答者を100として、その世帯がどのように変化したのかを比率で示したものである。家族構成が、現在でも「夫婦と子」世帯のままなのは約6割（61.2%）で、約3割（29.6%）が「夫婦のみ」へ、3.9%が「三世代家族」

調査対象ニュータウンの位置



*地図上の（）はサンプル数

「関西ニュータウン調査」の概要

調査対象地：関西8つの大規模NT
 調査対象者：20歳以上の有権者
 調査方法：郵送法
 使用名簿：選挙人名簿
 調査期間：2004年2月14日～3月15日
 回収率：回収/標本数=1685/4800=35.1%

千里NT（吹田・豊中市）：259/800（32.4%）
 泉北NT（堺市）：332/1000（33.2%）
 須磨NT（神戸市）：203/600（33.8%）
 平城NT（奈良市／精華・木津町）：177/500（39.4%）
 洛西NT（京都市）：148/500（29.6%）
 三田NT（三田市）：202/500（40.4%）
 西神NT（神戸市）：197/500（39.4%）
 トリヴェール和泉NT（和泉市）：150/400（37.5%）

表2 ニュータウン別の居住形態別構成比

	持ち家 一戸建て	購入 マンション	賃貸 マンション	公営住宅	その他	計
千里	21.4	19.5	33.5	22.2	3.5	100.0 (257)
泉北	40.9	22.4	20.3	13.0	3.3	100.0 (330)
須磨	42.5	31.5	12.0	9.5	4.5	100.0 (200)
平城	55.9	14.7	23.7	1.1	4.5	100.0 (177)
洛西	54.1	10.8	6.8	21.6	6.8	100.0 (148)
三田	60.2	29.9	3.4	1.5	5.0	100.0 (201)
西神	65.5	24.9	1.5	1.0	7.1	100.0 (197)
トリヴェール和泉	42.7	48.0	6.0	0.0	3.3	100.0 (150)
計	46.3 (768)	24.7 (410)	14.9 (248)	9.5 (158)	4.6 (76)	100.0 (1660)

表3 持ち家一戸建て層の入居当時の家族構成

	%	(度数)
独居	1.0	(6)
夫婦	10.4	(60)
夫婦と子	72.5	(420)
三世代	12.4	(72)
その他	3.6	(21)
計	100.0	(579)*

*持ち家一戸建て層768サンプル中、入居時と現在の家族状況質問のNA回答者を除く

表4 家族構成の変化の実態 ※持ち家一戸建て居住者かつ入居時「夫婦と子」

	家族人数	家族構成					計
		独居	夫婦	夫婦と子	三世代	その他	
入居時	4.02人	—	—	100	—	—	100.0 (420)
現在	3.26人	1.4	29.6	61.2	3.9	3.9	100.0 (415)
現在 (居住年数別)							
10年未満	3.78人	0.9	8.0	85.7	2.7	2.7	100.0 (112)
10～19年	3.44人	0.7	24.5	68.5	3.5	2.8	100.0 (143)
20～29年	2.80人	1.9	45.2	48.1	2.9	1.9	100.0 (104)
30年以上	2.56人	3.8	57.7	17.3	7.7	13.5	100.0 (52)

へと変化している。すなわち、NTの「夫婦と子世帯」は、「三世代家族」へと拡大することはあまりなく、多くの場合は「夫婦のみ」さらには「独居」へと縮小していつているのである。それは、居住年数が長くなるほど「夫婦のみ」に変化した家族が増加しているという事実（8.0%→24.5%→45.2%→57.7%）に象徴的に示されている。また平均家族人数という観点でも、入居当時4.02人から現在3.26人へと減少し、居住年数が長くなるほど減少するという特徴（3.78人→3.44人→2.80人→2.56人）も家族が縮小している実態を示している。

ニュータウン一戸建て世帯の今後の動向

NT一戸建て世帯は、入居後年数を経るにつれて、子供の独立等によって「夫婦のみ世帯」さらには「独居」へと家族構成を変化させている。今回調査の2004年時点では、「夫婦のみ」世帯が121サンプル、「独居」世帯は6サンプルと、数字的にはまだ少ない状況にあった。しかし、「夫婦」のみ世帯の状況を詳細に分析してみると、今後急速に「独居」世帯が増加すると予想できる。

表5は、「夫婦」のみ世帯（平均年齢：夫63.5歳、妻62.5歳）の今後の定住／転居の予定を問うた集計結果である。「夫婦」のみ世帯が「定住する」と答えている比率は82.6%で、この比率は、高齢になればなるほど高くなっている（71.0%→85.5%→92.0%）。この結果を見るかぎり、高齢夫婦世帯ほど定住志向が強く、いずれ配偶者が平均寿命をむかえる時期が訪れると、独居世帯へと変化していく可能性が高いと予測できるのである。

これまで持ち家一戸建て世帯に絞って、家族構成の変化を分析してきたが、NTの高齢化問題をさら

表5 今後の定住予定 ※入居時〔夫婦と子〕

	一生住み続けるだろう	転居するだろう	計
現在〔夫婦と子〕	76.8	23.2	100.0 (250)
現在〔夫婦〕	82.6	17.4	100.0 (121)
〔夫婦〕年齢別			
(60歳未満)	71.0	29.0	100.0 (31)
(60歳代)	85.5	14.5	100.0 (62)
(70歳代)	92.0	8.0	100.0 (25)

に解明していくためには、他の居住形態の実態把握はもちろん、独立した子供世代の状況も詳細に調査していく必要があるといえるだろう。

NTでは、M字型人口構成に象徴されるように、一般社会とは異なった急速な高齢化が進展していくことが予想される。しかもその時期は、もう間近に迫ったNTも存在しているのである。

では、NTの将来は全く悲観的な面ばかりなのだろうか？ この調査結果の中に、とても興味深い数字が明らかとなっている。それは、「あなたはニュータウンが好きですか」という質問に対して、全回答者の93.1%が「好きである」と答えていたという数字である。この驚異的に高い数字は、住民のNTに対する強い愛着を示しているだけでなく、今後発生してくる様々な高齢化問題に対して、NT住民自身が何か新しい解決策を生み出していくことを期待させる数字として私は考えている。

【参考文献】

- 大谷信介編 2005『ニュータウン住民の住居選択行動と生活実態』
- 大谷信介編 2006『ニュータウン住民の生活行動とネットワーク』
- 大谷信介編 2007『ニュータウンにおける自治会形成～町内会は日本の文化なのか』：以上、関西学院大学社会学部大谷研究室
- 松川尚子 2006「高齢化と家族構成の変化～ニュータウンにおける高齢化現象」：『都市研究』近畿都市学会学術雑誌 5・6号 pp175-89.